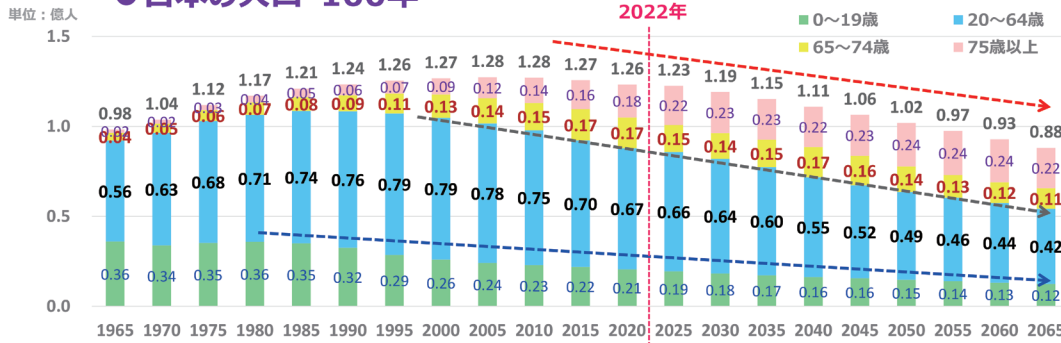


今回は「人口減+高齢化とお酒」です。

●日本の人口・100年

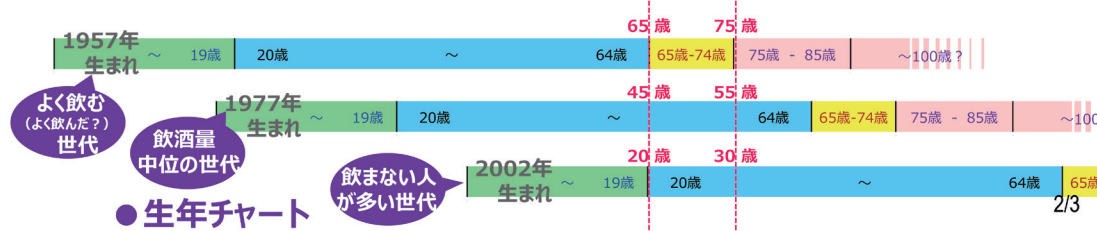
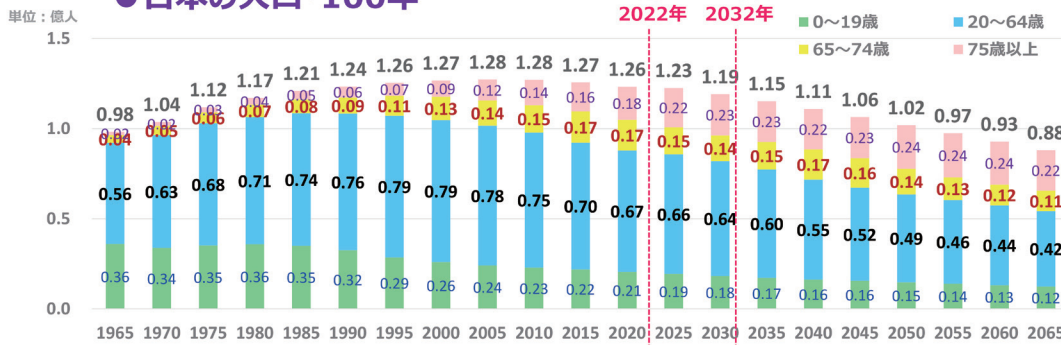


●日本の飲酒人口・70年

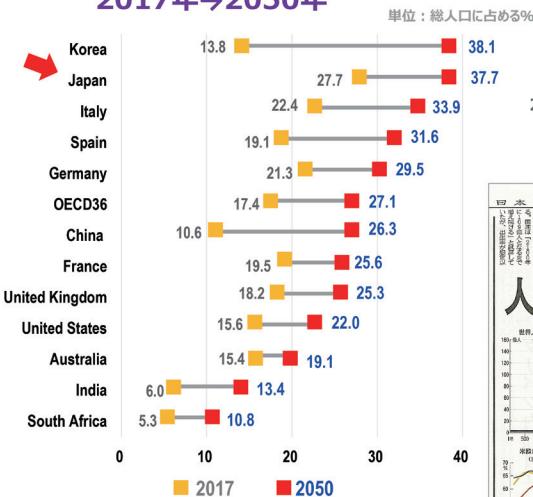
	1990	2000	2010	2020	2030	2040	2050	2060
総人口（億人）	1.24	1.27	1.28	1.26	1.19	1.11	1.02	0.93
主要飲酒層（20～74歳）人口（億人）	0.85	0.92	0.90	0.85	0.78	0.72	0.63	0.56
筆者の推定：日常的に飲酒する人口（億人）	0.24	0.23	0.21	0.20	0.18	0.16	0.13	0.10
筆者のイメージ：一人当たり飲酒量（2020年=1）	1.2	1.1	1.05	1	0.95	0.9	0.85	0.8
高齢者（65歳以上）の比率（%）	12%	17%	23%	28%	31%	35%	37%	39%

1/3

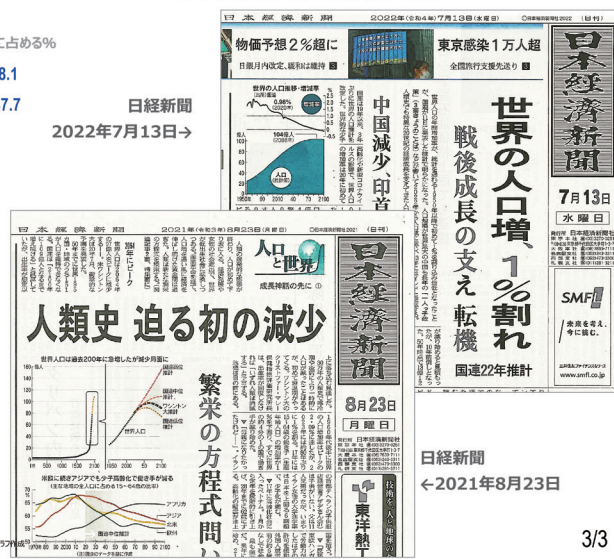
●日本の人口・100年



●主要国の65歳以上人口比率
2017年→2050年



●「世界人口も減少に」



○日本の人口・100年 総人口の減少は2011年に始まって約10年経過。19歳以下の人口減は1980年代に始まって40年以上経過。減少は今後もずっと続きます。

グラフは2017年発表の「出生中位・死亡中位」推計。2065年は0.88億人となっていますが、「出生低位・死亡中位」だと0.82億人となります。次回の推計発表は2023年の予定ですがコロナもあって、さらに減少の見込み。

○日本の飲酒人口・70年 人口減+高齢者増=飲酒人口急減。日本の酒類マーケット（量的マーケット）は、今後50年は縮小を続けると思います。

2020年現在、「日常的に飲酒」するのは2,000万人（0.2億人）程度。（出典：アサヒビール 2021年3月の発表）表のとおり「主要飲酒層人口」は0.85億人程度ですが、これは「飲酒0.2億人+月1回程度0.2億人+飲まない・飲めない人0.45億人」という構成だと考えられます。

筆者は、日常飲酒人口は今後、「10年ごとに200～300万人減」となるのではないかと推定します。

○生年チャート「食品」の場合、「需要は胃袋の数（人口）に比例」というのは概ね正しいですが、高齢者は食事が減ります。「お酒」の場合、「高齢者の飲酒量が減る」以外に、「若年層で飲まない人が増える」という要素も加わって、食品以上に減少するでしょう。これを反映して、飲酒する人の「一人当たり飲酒量」は10年ごとに5%程度減衰するのではないかと思います。

○主要国の65歳以上人口比率 世界の人口予測は、国連などが毎年公表しています。2017年現在の高齢者人口比率は、日本が世界トップで27.7%、2位イタリア22.4%、3位ドイツ21.3%。これが2050年になれば、トップが韓国38.1%、僅差2位が日本37.7%、3位イタリア33.9%。英国、アメリカ、オーストラリアなどは、2050年になっても日本の2017年の水準以下。引用したデータはOECDの「Health at a Glance」2019年版なのでコロナ前。各国の高齢化はさらに加速する可能性が高いでしょう。

○「世界人口も減少に」 日経新聞の「人類史上初の人口減少が迫る」という見出しは衝撃的。（戦争や疫病などによらない、自然減は歴史上初、の意）減少の始まりは今世紀半ば以降で、まだ今後何十年かは増えるけれど、その原動力はインドやアフリカとなり、酒類消費を期待できる国々の多くは減少がはじまります。

日本のお酒産業は、厳しい日本国内市場への対応として、海外市場開拓が不可欠ですが、今伸びている海外市場も、世界の高齢化と迫る人口減少を踏まえた戦略を考えねばなりません。（text = t.kita）